



沖縄の露地に咲いた
無憂華一輪

長嶺胃腸科内科外科医院
長嶺 信夫

奇跡の開花～関口老師贈呈の無憂華～

我が家の庭で一輪の無憂華の花が咲いた。樹齢わずか1年半、それも樹高35cmの小さな苗に花が咲いたのである（写真1）。



1. 関口老師贈呈の無憂華の開花（2008年5月14日撮影）

読者はたかが花一輪・・・そう思うかもしれない。しかしこのことは植物学的にも実に興味深いことなのだ。

この無憂華の苗は今年の1月末に愛知県一宮市の恵林寺住職・関口道潤師から筆者に贈られた12本の無憂華の内のひとつである。この苗木は関口師が2006年9月30日インド・ウッタランチャル州の種苗会社から無憂華の種を購入、翌日の10月1日に種を蒔き、10月下旬に発芽した苗である。

私が書いた菩提樹に関する随筆集が府中市の友人・安生充彦氏から新潟県の住職に送付され、それがさらに愛知県の関口師に転送された。その縁で仏教3大聖樹（菩提樹、無憂華、沙羅双樹）に関心をいだく私に丹精こめて育て

た無憂華の苗を贈ってくれたのである。

筆者はこの樹とは別に2006年秋にインドで6本の無憂華の苗を手に入れたのであるが、根づいたのはわずかに1本だけであったので、関口師から沢山の無憂華の苗を贈っていただき、小踊りして喜んだ。私は贈呈された無憂華の苗から7本を苗木入手のためインドまで同行してくれた沖縄菩提樹協会会員にわけあたえ、残りの苗を沖縄菩提樹苑に植樹するため自宅で育ててきたのである。

そして、朝夕水遣りをしながら観察してきたのだが、今年〈2008年〉の4月13日の朝1本の無憂華の枝先に仁丹の半分ほどの白い粒状の花芽が連なってついているのに気付いた。樹齢わずか1年半、それも30cmそこそこの小さな苗である。それが1ヵ月後の5月13日、たった一輪ではあるが薄く橙色をおびた花が咲いたのである。家内の尚子もびっくりして「まるで盆栽ね！」と笑っている。

専門書を書き替えねば！

先に植物学的にも興味深いと記載したが、無憂華（無憂華、ムユウジュ、*Saraca indica* L）は植物学専門書である「日本で育つ花木植栽事典」の中に、「植栽可能地はZone 11b～で、周年開花（沖縄本島では困難。石垣では生育するが開花に至らない）、実生して後、数年で花



2. 海洋博記念公園管理財団から贈呈された無憂華の開花（2008年1月17日撮影）

をつける」と記載されている。すなわち、沖縄本島では開花するどころか、生育も困難で、沖縄本島より南にある八重山諸島の石垣島では生育はするが開花に至らない、と記載されているからである。それが、沖縄本島のそれも強風が吹き、潮害も多い浦添市牧港の高台にある自宅の庭で樹齢1年半の幼木に花が咲いた。それだけではない。昨年5月に沖縄海洋博覧会記念公園管理財団から沖縄菩提樹協会に贈呈された無憂樹の取り木苗にも筆者の庭（鉢植え）で今年1月、少数ながら橙紅色の花が咲いたのである（写真2）。

ところで、無憂樹の花は開花後、しだいに花の色が橙色から紅色に変わってくるといわれているが、海洋博記念公園管理財団から贈呈された無憂樹の花は蕾の時から紅色に近い濃い橙色で、枝ぶりも葉間が長く、また新葉の色もインドやタイで見た無憂樹が薄紫から次第に黄緑に変化していくのに対し、白色ないし薄黄緑の新葉であることなどかなり異なっており、その差異に首をかしげている。上記の花木植栽事典によると、無憂樹が属するサラカ（*Saraca L.*）はマメ科の植物で、東南アジア原産で約10種が知られており、その代表樹が無憂樹であるとのことである。現在筆者が入手している樹の種が若干異なっているのかもしれない。

無憂樹に関してはすでに2007年5月号の沖縄県医師会報に詳述したが、無憂樹はブッダの母・摩耶夫人がお産のために里帰りの途中、ロンビニー園で休憩し、咲き誇る無憂樹の花に手を触れようとした時、急に産気づき、ブッダを出産した。安産だったため、憂いなしの樹、すなわち無憂樹（サンスクリット語でアショーカ、*Asoka*）と名付けられたと言われている。日本の植物園では温室で育てられていて、沖縄では唯一沖縄海洋博記念公園熱帯ドリームセンターの温室内でのみ見ることができる貴重な樹である。私は2006年の夏、この樹の存在を知り、海洋博記念公園管理財団に特別に取り木を依頼していた。その取り木が2007年5月、贈呈書とともに記念公園管理財団から沖縄菩提樹

協会に贈呈され、十分根づくまで、筆者の庭で育ててきたのである（写真3）。この無憂樹はインドのクシナガラで入手した無憂樹とともに「聖なる菩提樹植樹4周年」を記念して今年（2008年）6月1日、沖縄菩提樹苑に植樹した（写真4）。これからは、魂魄の塔に隣接した沖縄菩提樹苑で無憂樹を見ることができる。台風の際、風が強く、塩害が心配な場所であるが、大きく育ってくれることを願っている。クシナガラの涅槃堂の高僧から贈呈された沙羅双樹はまだ30cmほどの幼木なので、今しばらく自宅の庭で面倒をみなければならないようである（2008年6月記）。



3. 無憂樹の贈呈式（2007年5月13日撮影）



4. 沖縄菩提樹苑での無憂樹の記念植樹（2008年6月1日撮影）

参考文献

1. アポック社出版局編集：日本で育つ花木植栽事典、アポック社、1998年
2. 長嶺信夫：「汝の名は憂なしという。私をして憂なからしめよ」～無憂樹・・・うれいなしの樹～、沖縄県医師会報、Vol.43 No.5 2007年
3. 満久崇磨：仏典の植物、八坂書房、1995年

ぐーたらダイエット記

まちなと小児クリニック
新垣 義清

Walking を始めて2年が過ぎた。きっかけはきわめて単純な理由からだ。ある夜シャワーを浴びていてふと下を見ると、とび出た腹に隠れて大事な男のシンボルが見えない。ショックだった。口の悪い友人に話すと、廃用性萎縮だとの診断だったが完全な誤診である。生物学的種族維持本能〔スケベ根性〕は旺盛だし実践力もある。それまでメタボだの、減量などは自分には関係がない異次元のことだと思っていただけに、一気に危機感がつのってきた。とび出た腹を引っ込めなければならない。どうすべきか？もともと運動は嫌いである。運動するくらいなら寝ていたほうが良い。かと言って、食事の量を減らすのも無理だ。日頃「おれは食うために生きている」と公言しているだけに、食いたいものを我慢するというのは耐えられない。困った。数日悩んだ末にふと思いついた。昔（高校時代）長距離走は得意だったじゃないか。体育の時間の走りで他の生徒に負けたことはほとんどなかった。よし走ろう！ジョギングを始めた。駄目だった。3分も走れない。改めてこのン10年間の運動不足を思い知らされた。錆び付いているのは脳ミソだけではないようだ。Walkingならどうか？これはうまくいった。息子のお下がりのシューズをはき、万歩計を買い準備は整った。車で距離を測定したら7km弱。適当な距離だろう。万歩計で測ったら歩数は1万歩前後、時間は約80分。これも適当だ。

それ以来毎日のように（暑い日や寒い日、天気や気分の悪い日、飲み会のある日、あるいは今日はどうしても歩こうという強い意思の沸いてこない日などは除く）夕食後に家を出る。3日も持たないだろうという家族の冷たい視線を

感じながら歩き続けた。家の周りは坂が多いのでけっこう汗をかく。出来るだけ早くということを考えながら歩いているので、気持ちは競歩の選手になったつもりだ。頭の中では懐メロのレコードが回っている。藤山一郎や東海林太郎の歌を無言で歌いながら、黙々と歩く。視線は2メートル先。最近は美空ひばりの歌が加わってきた。声さえ出さなければ、ひばりよりも俺のほうが上手い。カラオケのイメージトレーニングをしているようなものだ。時々赤信号を見落としてびっくりしたりするが、幸いにも車にぶつかったりしたことはない。最初の頃は途中で息が上がり、足裏も痛くなり発赤し熱をもっていたが、いつしか慣れてしまった。歩くのがブームだか知らないが、結構Walkingしている人たちがいる。多いのは女性の二人連れだが、夫婦や若いペアも目立つ。よたよた歩いているお年寄りにはこちらが心配になってくる。あまり太っている人はいない。肥満度が一定程度を超えると歩くのも嫌になるのであろうか？

2年も歩いていると、いろいろなハプニングもあった。患者さんの親にも何回か出会った。診察室で偉そうにふんぞり返っている顔と、息切れをしてあえぎながら歩いている顔とのギャップが面白いらしい。「歩いているのを車から見ましたよ」と話しかけてくる人もいる。やはり沖縄は狭い。ばれたくなければ、帽子とサングラス、マスクが必要だ。一応考えてみたが、お巡りさんに不審者として尋問されそうなのでやめた。二人組みで自転車に乗り、布教活動をしている外国人の青年にも何回か声をかけられた。歩行のリズムを壊されるのがいやで片手を少し挙げて謝絶。何回か繰り返しているうちに近寄ってこなくなったが、「キョウモアルイテイルネ。ガンバッテ」と手を振ってくれるようになった。軽く頭を下げ、にっこり笑って答える。国際親善にささやかな貢献ができたかなとちょっといい気分。ある夜、途中で少し休憩していると中年の女性が近寄ってきた。中年とはいえ女性は女性だ。男でなければよい。俺の魅力に引きつけられたのかと想着いたら、いき

なり名前を呼ばれてびっくり。なんと中学時代の同級生だった。実はこの女性とは20年くらい前に運転免許証の更新所で会ったことがある。卒業以来の出会いだったので懐かしくなり、待ち時間の間に喫茶店に入った。コーヒーを飲みながら1時間ほど昔話に花が咲き、別れ際に約束をした。この次の免許更新の時には、40才を超えてしまう。「中年のおじさん、おばさんの顔はお互いに見たくないし見せたくもないだろうから、二度と会わないようにしようね。」ああしかし男女の約束ほどあてにならないものはない。あれほど固く約束したのに変なところでばったり会ってしまうとは…。

Walkingをやっているというとき必ず聞かれることは、何kgやせたかということ。答えは「わからない」。歩き始めた頃一度体重を量ったことがあった。家にある体重計を引っ張り出して足型の所にあわせて乗った。ボタンが何個かついている。適当に押してみたが何の表示も出ない。家のものに使い方を聞くのも馬鹿にされそうで気に入らない。昔の体重計は黙って乗っかれば、針がグルッと回って何kgと教えてくれた。時代は進歩しているというのに、わけの分からないボタンだらけの器械が増えてくるのは困ったものだ。クリニックにも体重計はおいてあるが、若いお母さんたちが自分で子供の体重を量っている。あんなに難しい操作を良くできるものだと感心してしまう。そういう訳で体重は年1回の人間ドックの時に量るのみである。最近は1日に何回も量るのが流行っているようだが、その内に体重計付きのスリッパでもできてくるだろう。体重の変化はわからないが、は

っきりしていることが一つある。ベルトの穴が2つ縮まったことだ。以前ズボンが次々に入らなくなり家内に文句を言った。「安物ばかりを買ってくるから縮んでしまったじゃないか」。という訳でダンスにしまいこまれていたズボンが、最近はまだ着けられるようになった。どうやらズボンは冤罪を被っていたらしい。

体重のコントロールには、食事の量を減らす必要があるということはわかっている。これがどうもまくいかない。目の前においしそうなものがあるとつい口に運んでしまう。特にホテルの立食パーティなどの時は最悪だ。腹八分目を心がけるとするのは私の辞書にはない。目いっぱい食ってしまう。どうも我々の世代の人間は、子供の頃に芋とタイ米で育ってきたせいだ、食べ物に対する執着心が強いようだ〔お前だけだと言われる事もあるが〕。乳児検診などのときに出てくる弁当も、残してしまったら罪悪感を感じてしまうので毎回ほぼ完食。うまいものは腹いっぱい食い、必要なら歩く距離を延ばせばよいと思っている。私の友人に糸満から那覇まで徒歩で通勤し、1日に3万歩くらい歩くという奴がいる。たんなる馬鹿なのかあるいはアホなのかよくわからない。しかし以前は肥満したアザラシのような腹だったのが最近かなりへこんできた。歩けば歩くほど余分な脂肪が減ってくるのは確かだ。生きてるうちにしか食うことはできない。よくパーティで一緒になる大食漢の小児科のM医師の口癖「ダイエットは明日から、明日から」〔5年前から言い続けている〕を口実にして、我慢せずに腹いっぱい食いそして歩こうと思う。

随筆



北の大地

沖縄セントラル病院
堀川 恭偉

北の大地、帯広で2年間の仕事を終えて、久しぶりに沖縄に帰ってきた。常夏の熱風を浴びると、つい数ヶ月前まで雪がちらついていた北海道が恋しくなる。思い起こせば南の端から北の端へ移動したのは、一昨年年初秋であった。妻と二人での狭いアパート生活が始まったのである。病院所有の社宅で、2階建て4室の表玄関に近いほうの部屋を貸していただいた。部屋の中には大きな石油タンクが設置されている。埋設パイプで室内の石油ストーブに連結されている。これは生命にかかわる必需品だそうだ。真冬に石油が切れたら凍え死ぬから、4分の1に減ったら必ず補充するよう常に石油タンクをチェックするよう指導された。窓は断熱ガラスで、以前のような2重ガラスはもはやないのだそうだ。冬の北海道では窓の外に物を置いておくと凍ってしまうので、冷蔵庫は適度な温度管理のために利用するのだと言う。これから極寒の地での生活が始まるのかと思うと身震いする。

北海道といえば鮭。鮭が川を上る姿をこの眼で見てみたいと思い釣り好きの先生に尋ねると「それならシベツへ行ったらいい」と聞かされた。根室と知床の間の町らしいが、地図を広げても一向に判らない。丹念にさがしてみると「あった、あった」。標津（シベツ）。北海道も沖縄と同じで、読みにくい地名が多い。アイヌ語に当て字をしているためであろう。シレトコにしたって知床とは、知らない人には想像もできない。帯広の隣の町に音更という町がある。新興住宅地でちょっとしゃれた町並みである。これをなんと読むのだろうかという、オトフケだそうだ。また、帯広から南に1時間ほど車を走らせるとナウマン像の化石が発見された有

名な町がある。虫類と看板に書いてある。なんと読むのかといえばチュウルイだそうだ。左程に、面白い地名の散在する北の大地を、沖縄から運び込んだパジェロミニを駆使してシベツまで行った。

途中、赤や黄色の紅葉が山肌を埋めていた。沖縄では経験できない風景である。この紅葉は10月になると里や街中に入り込んでくる。それはもう「見事」と膝をたたいてしまう。公園しかり、川べりや町外れだけでなく街路樹までが鮮やかに色づくのである。銀杏並木、姫りんごの街路樹、白樺の林など万華鏡の中を歩いているかのようなのである。

帯広から、歌手の松山千春のふるさとで知られる足寄（アショロ）を通り、阿寒を過ぎて、ただただ東へ向けてパジェロを駆けていく。ちょっとした大陸横断である。海などはまったく見えず、丘陵を駆け抜けていくさまは沖縄では味わえない。一面の牧草の片隅で牛が草を食む姿や、馬が数頭群れをなして走っている姿は眼を釘付けにする。しばし車を止めて眺めてみるのもいいものだ。丘陵をすぎると、果てしない平地に入り込む。一面のトウモロコシ畑やジャガイモ畑、ときにひまわりの畑に遭遇する。これを空から見ると黄色やピンク、緑の四角い帯を碁盤の目のように繋ぎ合わせた派手なパッチワークのように見えるから楽しい限りである。北海道旅行の際は、着陸前に飛行機の窓からこの景色を堪能あれ。

標津のサーモン科学館は標津川に隣接していた。遡上してくる鮭を捕獲して卵を取り出し、孵化した後に、稚魚を放流する養殖産業を大規模に行っているそうだ。その施設の一部を利用してサケマスの生態観察ができるようにガラス張りにしているのである。標津川には開閉式のダムが設けられていた。鮭の遡上を止める背の低いダムである。ダムの上かけられた橋を歩いていると、川面に黒くうごめくものがあった。よく見ると無数である。鮭であった。中には元気なやつも居て、ダムを飛び越えようと高く跳ねる魚もいる。肌寒い風に吹かれながら川

岸に下りたり橋の上を行ったり来たりしながら川面を見つめていたがダムを越えたのは1匹だけであった。その他の無数の鮭は、ダムの川下で列を成して性懲りもなく泳ぎ続けていた。ふと見るとダムの端に、水路が設けられていることに気がついた。幅は1m程度の水路で、遠くサーモン科学館の後方へと続いていた。そこには巨大水槽があった。

日の暮れないうちにと、標津を後にして、羅臼（ラウス）へ向かった。あらかじめ、院長にお願いして、根室や知床の限界で、いい宿泊施設を紹介して頂いたのだ。院長も釣りが好きで、知床半島突端でのつりの際にはよく利用しているという。「嵯峨」という民宿である。非常に気の優しい女将さんであった。沖縄県で娘が看護師として働いているらしく話も弾んだ。羅臼町立病院も人手不足らしく、いずれ帰ってくるらしい。たらふく北の名物を食べた後で、川べりに散歩に出ると、野生の鹿が、1匹立っていた。牡鹿である。立派な角を生やして、こちらをじっと見つめていた。どう出るのか、近づいてみた。10mまで近づいたが、一向に逃げる様子がない。そういえば、女将が、鹿が最近が増えて、困っているのだと話していた。夜になると鹿が山から町に下りてきて、店の前に植えてある花を食べてしまうのだそう。結構な群れをなして行き過ぎるようで、夜の街を闊歩する鹿は奇妙である。

翌朝、知床半島を一周した。国後島が間近に見える。辺戸岬から与論島が見えるというようなものではない。もっと間近である。よく晴れた日なら、鉄砲を担いだロシア兵が見えるかもしれない距離である。羅臼の港を出る漁船は国後を横目で見ながら出港するのだろうと思うと、国境を感じる。「国境侵犯で拿捕」などのニュースをマスコミで耳にすることはあったが、港からこうも国境が近いとは想像もできなかった。

知床半島を横断して、斜里と言う港町に入った。羅臼に比べると、同じ知床半島の付け根の北と南に当たるがずいぶんと賑わいが違う。こちらは、観光客も多くカニやらホタテやら物産店が多くある。我妻も誘われるように買い物をしてしまった。殺風景な網走街道を走り抜けると再び阿寒国立公園にたどり着く。屈斜路湖を南に眺めながら、陸別に入った。北海道でもっとも気温が低くなるころらしい。氷点下40度まで下がると言う。オーロラが観測されることでも有名である。9月のこの時期は、紅葉が真っ盛りで道行く左右の山肌は色とりどりである。感動の中、帯広に到着したのはその日の夜であった。初秋の一泊二日の長旅であった。

長い様でもあり、短い様でもあった北海道での仕事を終えて沖縄にやってきたのは、大仲先生を代表とするAMDAの活動に共鳴したからである。AMDA（アジア医師連絡協議会）は岡山県で産声を上げてすでに30年以上を経ており、沖縄県に支部が設立されたのは13年前である。国連のNGO団体として認可もされ、由緒のある機関である。先のミャンマーでのサイクロン被害や、中国四川省での地震の際は、AMDAからも支援隊が派遣されたようである。私も、広い世界を舞台に活動してみたいと思うのである。



北の大地を開拓する1台の耕運機を前にして、幾重もの紅葉に彩られる山々です。